



報道提供資料

令和3年7月13日（火）

問合せ：大阪市鶴見区緑地公園 2-136
（公財）国際花と緑の博覧会記念協会
企画事業課 課長代理 佐々木
総務部 審議役 三谷
<https://www.expo-cosmos.or.jp>
090-6913-1445（7月13日のみ）
06-6915-4513

2021年（第28回）コスモス国際賞の受賞者は

ピーター・ベルウッド 博士

**考古学と言語学の学際的研究による「初期農耕拡散仮説」を提唱し、
農耕の起源と世界各地でみられる初期農耕民の拡散の過程を明らかにした。**

公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会（会長：御手洗富士夫）は、7月13日開催の理事会で、コスモス国際賞委員会（委員長：尾池和夫）、同選考専門委員会（委員長：白山義久）からの報告を受け、オーストラリア国立大学名誉教授のピーター・ベルウッド博士（77歳）を2021年（第28回）コスモス国際賞の受賞者に決定した。

ピーター・ベルウッド博士は、オセアニアや東南アジアにおける新石器時代の暮らしを主な研究テーマにしながら、世界的な視野で人類の移動に密接に関与する農耕の拡散の在り方を研究する考古学者である。博士は考古学と言語学の学際的研究による「初期農耕拡散仮説」を提唱し、農耕の起源と初期農耕民の移動・拡散過程を明らかにするとともに、この研究を通して、自然と人間との共生の歴史を統合的な視点から探究した。



写真画像ファイルは次のURLにあります。
<https://www.expo-cosmos.or.jp/2021.jpg>

1. 選考の経緯

2021年3月、国内外の推薦人および自然科学系の学会、海外アカデミー等に推薦依頼を実施し、4月16日締め切りで34件の推薦書を受理した。

次に2021年4月から6月までコスモス国際賞選考専門委員会を3回開催し、2018年から2021年の4か年に推薦された候補者、計171件を対象として選考を行った。

その後、6月18日開催のコスモス国際賞委員会で最終の受賞候補者を決定、7月13日開催の国際花と緑の博覧会記念協会理事会において、コスモス国際賞委員会からの報告を受け、受賞者を決定した。

2021年コスモス国際賞の選考対象

2018年分34件、2019年分58件、2020年45件、2021年34件 合計171件（31カ国）

〔 例年は当年推薦分を含む3か年分の候補者を対象に受賞者を選考するが、コロナ禍により2020年の賞を中止したことから、4か年分の候補者を選考対象とした。 〕

<国別内訳>

日本(58)、アメリカ(39)、ドイツ(14)、イギリス(9)、オーストラリア(5)、ベルギー(3)、ブラジル(3)、エジプト(3)、フランス(3)、韓国(3)、スイス(2)、カナダ(2)、インド(2)、インドネシア(2)、シンガポール(2)、中国(2)、チリ(2)、南アフリカ(2)、マレーシア(2)、オランダ(2)、アルゼンチン(1)、スロバキア(1)、スペイン(1)、ポルトガル(1)、アイルランド(1)、キルギス(1)、ハンガリー(1)、チュニジア(1)、ケニア(1)、イタリア(1)、ベラルーシ(1)

2. その他

(1) 授賞式

令和3年11月12日（金）、住友生命いずみホール（大阪市中心部）で行う。

(2) その他

受賞者には賞状、賞牌および副賞（4,000万円）を贈呈する。

添付資料

- ・ 受賞者の概要
- ・ 授賞理由
- ・ 受賞者のコメント
- ・ その他（歴代受賞者、コスモス国際賞委員会委員・選考専門委員会委員名簿）

受賞者の概要

氏名 ピーター・ベルウッド Peter Bellwood

生年月日 1943 年 8 月 10 日（77 歳） イギリス・レスター生まれ

国籍 オーストラリアおよびイギリス

役職 オーストラリア国立大学名誉教授

学歴

1966 年 ケンブリッジ大学 学士
1969 年 ケンブリッジ大学大学院 修士
1980 年 ケンブリッジ大学大学院 博士

職歴

1967-1972 年 オークランド大学講師
1973-1975 年 オーストラリア国立大学講師
1976-1983 年 オーストラリア国立大学上級講師
1984-1999 年 オーストラリア国立大学准教授（考古学）
2000-2013 年 オーストラリア国立大学教授（考古学）
2013 年-現在 オーストラリア国立大学名誉教授

主な著書

1. Bellwood, Peter S. 1978 *The Polynesians*, London, Thames and Hudson.

邦訳：『ポリネシア』大明堂, 1985,

2. Bellwood, Peter S 1978 *Man's Conquest of the Pacific*, Auckland and London, Collins, North American edition, Oxford University, Press.

邦訳：『太平洋－東南アジアとオセアニアの人類史』法政大学出版局, 1989

3. Bellwood, Peter S. 1985. *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago*. Academic Press., Sydney.
4. Bellwood, Peter S. 2005 ***First Farmers: The Origins of Agricultural Societies***, Oxford Blackwell.
邦訳：『農耕起源の人類史』 京都大学学術出版会, 2008
5. Bellwood, Peter S. ed. 2013 ***First Migrants: Ancient Migration in Global Perspective***. Chichester, Boston and Oxford, Wiley Blackwell.
6. Bellwood, Peter S. 2017. ***First Islanders: Prehistory and Human Migration in Island Southeast Asia***. Chichester, Boston and Oxford, Wiley Blackwell.
7. Bellwood, Peter S. ed., 2019, ***The Spice Islands in Prehistory: Archaeology in the Northern Moluccas, Indonesia***, ANU Press, Canberra.

授賞理由

ピーター・ベルウッド博士は、主にオセアニアや東南アジアにおける新石器時代の暮らしを研究してきた考古学者である。博士は、世界的な視野で人類の移動に密接に関与する農耕の拡散の在り方を、農耕の誕生と初期農耕民の移動・拡散過程を大陸間で比較する方法で探求してきた。その主な成果として、以下の3点をあげることができる。

まず、博士は、メラネシア島嶼部に成立したラピタ文化（BC1500-1000年）が、東方に移動して島々の多様な環境に適応変化した結果、ポリネシア文化が形成されてきた、その過程を考古学の方法から明らかにした。また、オーストロネシア語族（台湾から東南アジア島嶼部、太平洋の島々に広がる語族）の人々が移動した軌跡を考古学、人類学、言語学などの専門家との共同研究から学際的に把握した。これらの成果を総合して、人類の拡散が、オーストロネシア語族の場合には、海洋技術の発展も関与しながら、初期食料生産者の移動・拡大に密接に関係していたことを明らかにした。

つぎに、博士は、地球規模での農耕起源と拡散に関する地域間比較研究を行った。世界の諸地域における農耕の拡散の状況を学際的な方法で復元することによって、先史時代における初期農耕の拡大過程を地球規模で比較することに成功した。博士は農耕の拡散には人間の移動が伴っており、人の移動とともに言語も拡散していくとみることで、農耕の拡散と言語語族の拡散とをかさねあわせて考察する方法を創出した。つまり、食料生産者と言語語族の拡大の関係は、オーストロネシア語族のみではなく、世界の多くの主要な言語語族にも適応できることを示した。博士は、人の集団の移動と農耕や言語の拡散が密接にかかわる現象を「初期農耕拡散仮説」として提示した。

また、博士は、人類の島嶼部への適応過程に関する研究も行った。人類は、約130万年前にジャワに到着したホモ・エレクトスやホモ・フローレンシスから現生人類に至るまで、島嶼部にも移動して適応してきた。博士は、主として東南アジアの島嶼部における考古学・古人類学的事例を用いて、人類の島嶼部への生物的・文化的な適応過程を学際的な視点から明らかにした。また、5万年前の農耕開始以前のホモ・サピエンスの移動、および南中国からのオーストロネシア語族の人や言語の移動などにも言及している。

このように、博士の研究はポリネシア文化の形成に関する考古学的研究を出発点にしながらも、言語学の研究と密接なかわりを持った「初期農耕拡散仮説」を提示して、地球的な視野から人類の移動と農耕の拡散との関連を、自然と人類とのかかわり方の研究として展開してきた。

地球環境学の分野では、人類は狩猟採集社会から農耕社会に移行するにともない、定住化が進行して人口が増大し、小麦や稲などの栽培植物に従属して広大な面積の自然植生を農耕地に改変したことによって、地球環境に大きな影響を与えたといわれている。また、その結果、人間社会と野生動物との距離が近づいて新たな感染症が発生するといった現象も引き起こされている。現在、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックが起こり、自然と人間との関係性の見方において新たな転換期を迎えている中、ピーター・ベルウッド博士の研究は、コスモス国際賞が掲げる「自然と人間との共生」を省みる上で、その礎となる重要な業績であると評価した。

受賞者コメント

人類が厳しいパンデミックと直面しているこの世界情勢の中で、2021年コスモス国際賞を賜り、とりわけ光栄に存じます。これまでヒューマンサイエンスの分野で傑出した研究者を多数顕彰されてきたこの賞をいただき、身に余る思いです。私は人類史を研究しておりますが、人類の過去や現在の行動については、数多くの歴代受賞者の方々が究明に尽力されてきました。

コスモス国際賞の重要な目的の一つは、人類およびその地球に対する影響の研究を地球的視点から統合的に行うことの重要性を高めることです。近代以前の人間集団について学際的に研究する歴史家として、私が実感するようになったのは、人類の過去や人類が地球に及ぼす影響を本当に理解するためには、多くの様々な科学的専門分野での調査研究を活用すべきだということです。ヒトとして、私たちは文化や社会を形成し言葉を使います。また私たちの肉体には骨格と遺伝子が含まれています。人間集団の歴史を広い視野から考察するには、多くの分野—特に考古学・言語学・生物人類学—で得られた研究結果を知る必要があります。

私は、1960年代にケンブリッジ大学で考古学を学んでいた時、ユーラシア西部を主な研究対象とし、考古学そのものに深く取り組んでいました。1967年には、オークランド大学で教職に就くためニュージーランドに渡り、ポリネシア人と彼らのすばらしい祖先に関する発見をしました。彼らの一部は最終的に赤道線を地球の3分の2周分も移動し、マダガスカル、イースター島、さらには南米にまで到達しました。ポリネシアにおける初期の研究の結果、私は一つの重要な結論に至りました。ポリネシア人は、オセアニアを越えたどこかに深い起源を持っており、彼らの祖先をたどるためには実に多くの学問分野にわたる視点が必要であると思い至ったのです。

今日の科学者たちの間では、ポリネシア人の直接的な故地（homeland）は、古代遺物・言語・遺伝子の観点からいえば、中国南部や東南アジアであると理解されています（全人類としてみると、究極的な故地はアフリカだとされています）。私は、オーストロネシア語族の5千年にわたる拡散の最後の行程として、ポリネシア人は人類史における移住の重要性を例証していると考えました。ポリネシア人の場合、航海術およびすぐれた食料生産の自給自足経済によって移住が促進されました。これを支えたのは家畜化・栽培化された多数の動植物で、それらは海路でも陸路でも遠方まで運ぶことができ、他の土地に移しても繁殖可能でした。

私は1980年代までに、オセアニアに限らず地球規模での人間社会の営みにおける食料生産の重要性に気づき始めました。食料生産は人口増加の原動力となり、その結果、それぞれの文化的・経済的な生活様式、言語、遺伝子を持つ人々が、大陸および海域に広く幾度も拡散していきました。今日の世界は、ユーラシア、アフリカ、南北アメリカおよび太平洋において、植民地時代の大規模な人口変動を経てもなお、初期の食料生産民の移動を反映したものとなっています。

言うまでもなく、初めて移住した人類は農耕民ではありません。ホモ・サピエンスという種としての人類は、その歴史を30万年から5万年前にアフリカで出現した時に遡ります。その後旧石器時代に、人類はユーラシア、オーストラリア、そして南北アメリカへと移住しました。しかし、今日においても世界の大部分を構成する民族・言語および遺伝的な祖先の大きな移動は、人類が食料を生産し存続してきた直近1万年の間に起こりました。この1万年前から現代に至る完新世の温暖な気候のもと、度重なる移住や長期にわたる人間集団の混合が促されたのです。過去1万年のグローバルな歴史を理解することによって、私たち一人一人が、自然を背景に常に変わりゆく人類の存在における自らの立ち位置を知ることができるでしょう。私が常に目指してきたのは、私たちの祖先のすばらしい功績を皆さんにお伝えすることです。彼らの功績は、現代を生きる私たちにインスピレーションを与えてくれると思っています。

コスモス国際賞歴代受賞者（肩書きは受賞時）

「コスモス国際賞」は、「自然と人間との共生」という理念の発展に貢献し、「地球生命学」とも呼ぶべき、地球的視点における生命相互の関係性、統合性の本質を解明しようとする研究活動や学術活動を顕彰するために設けられた国際賞です。

1993 年（第 1 回）受賞者

ギリアン・プランス卿

イギリス 王立キュー植物園園長

南米アマゾン地域を中心とする熱帯植物研究の権威。地球全域の植生を統一データ化する「地球植物誌計画」を提唱、世界の植物学者とネットワークを組んで実現に努力した。

1994 年（第 2 回）受賞者

ジャック・フランソワ・バロー博士（物故者）

フランス パリ国立自然史博物館教授

太平洋の島々の自然と人々の暮らしについて民族生物学的な調査、研究を行い、これをもとに人間と食糧をテーマに、全地球的な視点からユニークな考察を発表した。

1995 年（第 3 回）受賞者

吉良龍夫博士（物故者）

日本 大阪市立大学名誉教授

光合成による植物の有機物生産の定量的研究をもとに、生態学の新分野となる生産生態学を確立。東南アジア地域の熱帯林生態系の研究で指導的な役割を努めた。

1996 年（第 4 回）受賞者

ジョージ・ビールズ・シャラー博士

アメリカ 野生生物保護協会科学部長

40 年にわたり、世界各地で様々な野生生物の生態と行動を研究。『マウンテンゴリラ・生態と行動』『ラストパンダ』など数多くの著書で全世界に野生動物の実態を知らせた。

1997 年（第 5 回）受賞者

リチャード・ドーキンス博士

イギリス オックスフォード大学教授

1976 年に出版された著書『利己的な遺伝子』で、生物学の常識を覆す大胆な仮説を発表。その後も、生物の進化について新しい見解を提示して、学会に論争を起こしている。

1998 年（第 6 回）受賞者

ジャレド・メイスン・ダイアモンド博士

アメリカ カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授

医学部教授として生理学を研究する一方、40 年にわたりニューギニアの熱帯調査を行い、これらを基に人類の歴史的な発展を再構成したユニークな考察を発表した。

1999 年（第 7 回）受賞者

呉征鎰（ウー・チェン・イー）博士（物故者）

中国 中国科学院昆明植物研究所教授・名誉所長

中国を代表する植物学者。中国を拠点に東アジア地域の植物の調査研究に取り組み、中国全土の植物の種の多様性を網羅する『中国植物誌』の編集を主導、刊行を実現させた。

2000 年（第 8 回）受賞者

デービッド・アッテンボロー卿

イギリス 映像プロデューサー、自然誌学者

野生生物のドキュメント映像のパイオニア。BBC 時代から退社後を含め、約半世紀にわたって、地球上の野生の動植物の生の姿を、優れた映像で全世界に伝えた。

2001 年（第 9 回）受賞者

アン・ウィストン・スパーン教授

アメリカ マサチューセッツ工科大学教授

都市と自然は対立するものでなく、周辺の地域環境と調和し、その一部として存在する都市の構築が可能であるとし、都市が自然との調和をはかりながら発展する方策を示した。

2002 年（第 10 回）受賞者

チャールズ・ダーウィン研究所

エクアドル・ガラパゴス諸島

1964 年設立の国際的 NGO・NPO 組織。南米エクアドル領のガラパゴス諸島で、ゾウガメ、イグアナなど、特異な固有生物の調査研究と保護に当たっている。

2003 年（第 11 回）受賞者

ピーター・ハミルトン・レーブン博士

アメリカ ミズーリ植物園園長

米国を代表する植物学者で、地球の生物多様性の保全を提唱した国際的な先駆者。常に地球的な視点で生命の問題を考え、学術と実践両面で自然と人間との共生に貢献した。

2004 年（第 12 回）受賞者

フーリャ・カラビアス・リジョ教授

メキシコ メキシコ国立自治大学教授

途上国の立場から全地球的な環境問題を考え、フィールドワークとさまざまな学問分野の研究を統合したプログラムを実施し、異なる条件下での困難な課題に優れた成果を挙げた。

2005 年（第 13 回）受賞者

ダニエル・ポーリー博士

カナダ ブリティッシュ・コロンビア大学水産資源研究所所長・教授

漁業と海洋生態系の関連を包括的に研究。海洋生態系保全と水産資源の持続的利用を可能にする科学的モデル開発など、海洋生態系と資源研究の分野で優れた業績を収めた。

2006 年（第 14 回）受賞者

ラマン・スクマール博士

インド インド科学研究所 生態学センター・教授

ゾウと人間との生態関係や軋轢への対処をテーマとした研究から、生物多様性保護と自然環境の保全全般にわたる多くの提言を行い、かつ実行し、野生生物と人間との共存という分野での先駆的な取り組みを行なった。

2007 年（第 15 回）受賞者

ジョージナ・メアリー・メイス博士（物故者）

イギリス ロンドン大学自然環境調査会議個体群生物学研究センター所長兼教授

絶滅危惧種を特定・分類し、科学的な基準を作成することにおいて指導的役割を果たし、種の保全、生物多様性保全に大きく貢献する取り組みを行なった。

2008 年（第 16 回）受賞者

ファン・グエン・ホン博士

ベトナム ハノイ教育大学名誉教授

戦争や乱開発がマングローブの生態系に壊滅的な打撃を与えたベトナムで、マングローブの科学的、包括的な調査・研究を行い、マングローブ林の再生に大きな成果をあげた。

2009 年（第 17 回）受賞者

グレッチェン・カーラ・デイリー博士

アメリカ スタンフォード大学教授

人類社会が依存する生物多様性のもつ「生態系サービス」の価値を包括的に捉えて、「国連ミレニアム生態系評価」など国際的な取り組みに貢献するとともに、生態学・経済学を統合し、自然資本の持続的な利用のために「自然資本プロジェクト」を実施する等大きな役割を果たした。

2010 年（第 18 回）受賞者

エステラ・ベルゲレ・レオポルド博士

アメリカ ワシントン大学名誉教授

父アルド・レオポルド氏（1887－1948）が提唱した「土地倫理」を継承・追及するとともに、アメリカ各地においてこの考えを広げるなど、多大な功績を残した。

2011 年（第 19 回）受賞者

海洋生物センサス科学推進委員会

事務局：アメリカ ワシントン DC

海洋生物の多様性、分布、生息数についての過去から現在にわたる変化を調査・解析し、そのデータを海洋生物地理学情報システムという統合的データベースに集積することにより、海洋生物の将来を予測するプロジェクト「海洋生物センサス」を主導した。

2012 年（第 20 回）受賞者

エドワード・オズボーン・ウィルソン博士

アメリカ ハーバード大学名誉教授

アリの自然史および行動生物学の研究分野で卓越した研究業績をあげ、その科学的知見を活かして人間の起源、人間の本性、人間の相互作用の研究に努めたほか、生物多様性保全や環境教育を推進する実践家として活動した。

2013 年（第 21 回）受賞者

ロバート・トリート・ペイン博士（物故者）

アメリカ ワシントン大学名誉教授

生物群集の安定的な維持に捕食者の存在が不可欠なことを、明快な野外実験によって示し、キーストーン種という概念を提唱した。一連の研究は、生物多様性を扱う群集生態学の分野に新しい視点をもたらし、生態学はもとより保全生物学や、一般の人々の生物多様性への理解に大きな影響を与えた。

2014 年（第 22 回）受賞者

フィリップ・デスコラ博士

フランス コレージュ・ド・フランス教授

人類学者として、南米アマゾンに住む先住民アシュアールの人々の自然観とそこの自然と関わる諸活動に焦点を当て、これらの綿密な調査から哲学的な思想へと論を進め、自然と文化を統合的に捉える「自然の人類学」を提唱した。

2015 年（第 23 回）受賞者

ヨハン・ロックストローム博士

スウェーデン スtockホルム・レジリエンス・センター所長

人類が地球システムに与えている圧力が飽和状態に達した時に不可逆的で大きな変化が起こりうるとし、プラネタリーバウンダリーを把握することで、壊滅的な変化を回避でき、その限界がどこにあるかを知ることが重要であるという考え方を示した。

2016 年（第 24 回）受賞者

岩槻 邦男博士

日本 東京大学名誉教授

生物多様性を探求し、伝統的な手法に加えて、分子系統的な手法も取り入れつつ、包括的かつ多面的に植物系統分類学を発展させた。また、系統分類学を含めた多様性生物学による生物の統合的理解の重要性を説き、そのような理解が生物の豊かさや自然との共生を支える重要な原理であることを明らかにした。

2017 年（第 25 回）受賞者

ジェーン・グドール博士

イギリス ジェーン・グドール・インスティテュート創設者

1960 年から、野生チンパンジーの研究を続け、その全体像を明らかにするとともに、チンパンジーが住む森を保全するための植林活動や環境教育活動を行った。博士が創案した青少年が担い手となる環境教育プログラム「ルーツアンドシューツ」は 99 カ国で約 15 万団体が、その活動を展開している。

2018 年（第 26 回）受賞者

オギュスタン・ベルク博士

フランス フランス国立社会科学高等研究院教授

和辻哲郎の著作「風土」から大きな影響を受け、風土概念をさらに拡充、深化、発展させ、「風土学 (mésologie)」と名づけられる新たな学問領域を切り拓き、自然にも主体性があるという「自然の主体性論」を提唱した。

2019 年（第 27 回）受賞者

スチュアート・L・ピム教授

アメリカ デューク大学教授（保全生態学）

地球上の生物の食物網の複雑さや種の絶滅速度等についての理論を提唱し、地球規模の生物多様性に関する政策などに大きな影響を与えると共に、生物保全活動を実践する団体を支援する NGO を設立するなど、生態系や生物多様性の保全に対して、科学と実践の両面において多大な功績を収めた。

2021 年コスモス国際賞 賞委員会委員および顧問
International Cosmos Prize Committee

2021.4 (五十音順)

役職 Position	氏 名 Name	専門分野 Specialty	職 名 Official Title
委員長 Chairperson	尾池 和夫 Dr. OIKE Kazuo	地球科学 Geoscience	静岡県立大学 理事長 President, University of Shizuoka
副委員長 Vice Chairperson	山極 壽一 Dr. YAMAGIWA Juichi	人類学、霊長類学 Anthropology, Primateology	総合地球環境学研究所 所長 Director General, Research Institute for Humanity and Nature
委員 Member	秋道 智彌 Dr. AKIMICHI Tomoya	生態人類学 Ecological anthropology, Ethno-biology	山梨県立富士山世界遺産センター 所長 Director General, Fujisan World Heritage Center
委員 Member	浅島 誠 Dr. ASASHIMA Makoto	発生生物学 Developmental biology	帝京大学 特任教授 Research Professor, Teikyo University
委員 Member	池内 了 Dr. IKEUCHI Satoru	天文学 Astronomy	総合研究大学院大学 名誉教授 Professor Emeritus, The Graduate University for Advanced Studies
委員 Member	磯貝 彰 Dr. ISOGAI Akira	農芸化学 Agricultural chemistry	奈良先端科学技術大学院大学 名誉教授 Professor Emeritus, Nara Institute of Science and Technology
委員 Member (選考委員長兼務)	白山 義久 Dr. SHIRAYAMA Yoshihisa	海洋生物学 Marine biology	京都大学 名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
委員 Member	武内 和彦 Dr. TAKEUCHI Kazuhiko	緑地環境科学 Landscape and environmental science	公益財団法人地球環境戦略研究機関 理事長 President, Institute for Global Environmental Strategies
委員 Member	中西 友子 Dr. NAKANISHI Tomoko	放射線植物生理学 Radioplant physiology	星薬科大学 学長 President, Hoshi University
委員 Member	西澤 直子 Dr. NISHIZAWA Naoko	植物分子生物学 Plant molecular biology	石川県立大学 学長 President, Ishikawa Prefectural University
委員 Member	林 良博 Dr. HAYASHI Yoshihiro	動物資源科学 Animal science and resource	東京大学 名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
委員 Member	鷲谷 いづみ Dr. WASHITANI Izumi	生態学・保全生態学 Ecology, Conservation ecology	東京大学 名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
委員 Member	和田 英太郎 Dr. WADA Eitaro	生物地球科学 Biogeochemistry	京都大学 名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University

役職 Position	氏 名 Name	専門分野 Specialty	職 名 Official Title
顧問 Advisor	岩槻 邦男 Dr. IWATSUKI Kunio	植物分類学 Systematic botany	東京大学 名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
顧問 Advisor	岸本 忠三 Dr. KISHIMOTO Tadimitsu	免疫学 Immunology	大阪大学免疫学フロンティア研究センター 特任教授 Project Professor, Immunology Frontier Research Center, Osaka University
顧問 Advisor	中村 桂子 Dr. NAKAMURA Keiko	生命科学・生命誌 Biohistory	JT 生命誌研究館 名誉館長 Honorary Director, Biohistory Research Hall

2021 年コスモス国際賞 選考専門委員会委員
International Cosmos Prize Screening Committee of Experts

2021.4 (五十音順)

役 職 Position	氏 名 Name	専門分野 Specialty	職 名 Official Title
委員長 Chairperson	白山 義久 Dr. SHIRAYAMA Yoshihisa	海洋生物学 Marine biology	京都大学 名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
副委員長 Vice Chairperson	池谷 和信 Dr. IKEYA Kazunobu	環境人類学 Environmental anthropology	国立民族学博物館 教授 Professor, National Museum of Ethnology
委員 Member	池邊 このみ Dr. IKEBE Konomi	緑地環境科学 Landscape and Environmental science	千葉大学大学院園芸学研究科 教授 Professor, Graduate School Environmental Science and Landscape, Chiba University
委員 Member	モンテ・カセム Dr. Monte Cassim	環境科学 Environmental science	大学院大学至善館 学長 President, Graduate School of Leadership and Innovation, Shizenkan University
委員 Member	亀崎 直樹 Dr. KAMEZAKI Naoki	動物生態学 Animal ecology	岡山理科大学生物地球学部 教授 Professor, Faculty of Biosphere-Geosphere Science, Okayama University of Science
委員 Member	佐倉 統 Dr. SAKURA Osamu	科学技術社会論 Science and technology studies	東京大学大学院情報学環 教授 Professor, Interfaculty Initiative in Information Studies, The University of Tokyo
委員 Member	ケビン・ショート Dr. Kevin Short	文化人類学 Anthropology	東京情報大学環境情報学科 元教授 Former Professor, Department of Environmental Information, Tokyo University of Information Sciences
委員 Member	高村 ゆかり Ms. TAKAMURA Yukari	国際法、環境法 International law, Environmental law	東京大学未来ビジョン研究センター 教授 Professor, Institute for Future Initiatives
委員 Member	辻 篤子 Ms. TSUJI Atsuko	科学ジャーナリスト Science journalist	中部大学 特任教授 Project Professor, Chubu University
委員 Member	横山 潤 Dr. YOKOYAMA Jun	植物分類学 Systematic botany	山形大学理学部 教授 Professor, Faculty of Science, Yamagata University